



Title	アリオストの『オルランド・フェリオーソ』における歴史的事件への暗示
Author(s)	高岡, 幸一
Citation	Gallia. 2001, 40, p. 19-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9626
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アリオストの『オルランド・フュリオーズ』における 歴史的イベントへの暗示

高岡 幸一

『オルランド』XXVI, 30-53はMerlinの泉水彫刻の浮彫の描写である。アレゴリックな怪物描写で始まるこの浮彫の内容やその歴史的な暗示について以下に考察してみよう。まずは、この泉水彫刻の場面へと至る状況を眺めよう。

1. 登場人物が泉水彫刻を見出すまで (XXVI, 1-30)

ガスコーニュのある荒野において二つの群衆が合流する。一方ではスペイン側から悪党Ferrauの強欲な母親Lanfusaが、人質のChiaromonte (Clairmont) 家の二人の若者MalagigiとVivianoを楯に、Bayonneの悪党Maganza (Meyence) 家のBertolagiとの間で、報償金や高価な品々と引き替えに取引しようとしてやって来る。他方からはBertolagiが宿敵Chiaromonte家の若者二人を捕虜として手に入れるため財宝を車に積んで約束の取引の場に向かう。この悪党同士の人質交換の場に、人質救出のため駆けつけたChiaromonte家の二人RicciardettoとAldigiero、これに助太刀を買って出たRuggieroと突如この場を通過する際正義の仲間に加わる遠来の旅の騎士(女剣士) Marfisa(実は彼女はRuggieroの妹であるとずっと後に判明する)の四人の強者たちが攻撃を仕掛けるところからXXVIは始まる。

RicciardettoとAldigieroはBertolagiを見つけるなりこれに攻撃を仕掛け、殺し、これを合図にRuggieroとMarfisaも行動を開始し、二人の騎士はどちらも見事な槍さばきを披露する。急襲を受けたモール勢とMaganza家の一群は互いに相手が裏切り、取引が決裂したと勘違いし、混乱し、潰走する。瞬く間に両軍を打ち破り、人質を奪回した四人の騎士は兜を脱ぎ、Marfisaが女性と分かり、皆は驚く。家来たちは積み荷を解き、食事を調える間、お互いの腕前に感心したRuggieroとMarfisaは特に親しく会話を弾ませる。やがて近くの木陰に泉水を見つけ、勝利者はここで凱旋を祝うが、この泉水こそかつて預言者Merlinがフランスの地に造った四つの泉水のうちの一つで、大理石で精巧な浮彫が施され、声さえ出ればまるで生きた像と思えるほどだった (*direste che spiravano e, se prive / non fossero di voce, ch'eran vive.*) (XXVI, 30)¹⁾。

2. 泉水彫刻の描写 (XXVI, 31-36)

まずはそこに表出された浮彫の図柄が説明される (XXVI, 31-36)。「そこでは一匹

1) テキストはRicciardi版を用い、日本語訳は著者訳による。

の獣が森から現れる姿が/見える、残忍で、憎々しく、狂暴な顔つき/をし、耳は驢馬の耳をし、頭と歯は、/狐のそれで、飢えに乾ききっており、/爪は獅子の爪をし、残りの他の部分は/すべて狼のそれであり、...」(Quivi una bestia uscir de la foresta / pareva, di crudel vista, odiosa e brutta, / ch'avea l'orecchie d'asino, e la testa / di lupo e i denti, e per gran fame asciutta : / branche avea di leon ; l'altro che resta, / tutto era volpe ; ...) (XXVI, 31) とここまでは単なる「怪物描写」である。ところがこの後この恐ろしい怪物を四人の人物が槍や、剣や、矢で殺している光景が説明される。

少し後に判明することではあるが、どうもこの怪物は「貪欲」のアレゴリーであるらしい。「貪欲」という名の怪物が遂に四人の勇者によって誅される図柄とは、ここで人質を金品財宝で売買しようとする悪党たちを四人の騎士が征伐した勝利の記念として、この戦いの後の宴席を飾るいわば *trophée* としてふさわしいものかも知れない。ところが、Merlinの泉水の浮彫はさらに多くのことを語っている。

怪物が蹂躪している土地は、フランス、イタリア、スペイン、イギリスの全土、ヨーロッパとさらにアジアにまで及び、怪物が襲うのは、平民から高位の者まで各階層に至り、特に王侯貴族にいっそうの牙を向ける。つまり、社会的身分の高い者ほど貪欲に耽りやすい。最悪の被害はローマの都で、枢機卿や法王も狙われ、聖ペトロが汚辱され、信仰が危機に瀕する。この恐るべき獣の前には、城壁も城塞も敵でなく、神の僕にまで魔手が延びるかと思えば、愚衆からは崇められ、天国と暗闇とのいずれの扉の鍵も握ると、獣が豪語するが如し。

この獣に対し果然と立ち向かうのは、頭に勝利の月桂樹を戴いた一人の騎士、脇に同じ黄金の百合の紋章をもつ三人の若者もいる。各自が頭部や衣装の裾に刻まれた名を持っている。獣の腹に柄まで剣を突き刺すこの騎士にはフランス国王 François 1^{er} と明記され、オーストリアの Maximilien もおり、孫の神聖ローマ帝国皇帝 Carlo V (Charles-Quint) ²⁾ は獣の喉を槍で一突きする。胸を射抜くのはイギリス国王 Henry VIII と記されている。フランス国王の近くには同じ百合の花の紋章をつけ、背には十世と刻した一匹のライオンが獣の耳に歯を向けている ³⁾。

3 . Malagigi による泉水彫刻の解説 (その1) (XXVI, 37-47)

『オルランド』の登場人物たちがこのような図柄を眺めても、石に刻まれた名を見ても何も理解できない。好奇心に駆られた騎士たちや Marfisa が誰かこの謎を解く者はいないかと云うと、救出された人質の Viviano が降神術を心得た弟、Malagigi に目配せし、Malagigi は話し出す。

「ここに名の刻まれた連中はまだ生存しておらず、七百年後の未来の世に栄光に包まれて生まれる者たちで、ブリタニアの魔術師 Merlin が Arthur 王の時代にこの世に起こるべき事件を素晴らしい技巧で彫刻家に描かせたものだ。「貪欲」のア

2) 『オルランド』初版(1516)(40歌)時には Charles-Quint は単に Carlo di Borgona であって、帝位に就くのは 1519 年である。

3) Medici 家出身の教皇 Leo X のこと。ウフィッチ美術館蔵の Raffaello の肖像で有名なこの教皇が、名前の連想から、獅子の姿で現れるのは興味ある。なお、フランス王家の紋章は黄金の百合で、Medici 家のそれは赤百合。

レゴリーであるこの怪獣は、黄金時代の後、人間が畑に境界線を引き、耕す土地を分配し、所有の概念が生まれると共に、冥界からこの地上に現れた。初めの頃はまだ全世界に徘徊しておらず、多くの国は手つかずに放っておいたが、時代と共に成長を重ね、またこれからも成長を続け、巨大な怪獣となり、残虐の限りを尽くすであろう。」

「この怪獣に最初に一撃を加えることとなるのは François I^{er}であり、この王の『恵まれた治世も最初の頃はまだ王冠も彼の頭にしっかりとせず』(L'anno primier del fortunato regno, / non ferma ancor ben la corona in fronte,) (XXVI, 44)、アルプスを越えてフランス軍に反抗するスイスの暴動勢力の鎮圧に兵を向けるが失敗し、再度の遠征では百合の花をはためかしロンバルディアを南下し、スイスを粉碎し、教会軍、スペイン軍、フィレンツェ軍を破り、難攻不落のMilanoを開城させる。」

この辺りに来れば、図柄の解説というより、Malagigiの口を借りての16世紀初頭のヨーロッパの政治情勢の説明であり、Ariostoの同時代の読者にとっては周知の事実である。ここではNovaraの戦い(1513)、Marignanの勝利(1515)の史実が暗示されている⁴⁾。Milano攻防に関して見せたFrançois I^{er}(1494-1547)の勇氣は「偉大なカエサルの魂」や「アレクサンドロスの幸運」にも譬えられる。このFrançois I^{er}への頌詞はかつてCharles Quint(1500-1553)へのそれ(XV, 24sq.)とペアをなす⁵⁾。16世紀前半のヨーロッパ覇権の均衡を握るこの両雄に同じhomageの機会をもつことは、バランス感覚に優れた詩人の才であると同時に、昔からフランス覇臣のFerraraのEste家に仕える詩人の任であったのかも知れない。

4 . Malagigiによる泉水彫刻の解説(その2)(XXVI, 48-51)

Malagigiの解説の前半はFrançois I^{er}の頌詞で占められた感があるが、Malagigiがここまで語ると、Marfisaを始め聴衆はさらに図柄に現れる他の人物たちについても知りたいという気を起こす。そこで、先ず名指されるのがベルナルド、「メルランが特記して評価していた」(che Merlin molto nel suo scritto apprezza.) (XXVI, 48)と言うが評価していたのはMerlinよりも勿論Ariostoである。Malagigiは「彼のお陰で、ビビエナは、/隣のフィレンツェやシエナほどの名を上げる。」(Fia nota per costui — dicea — Bibiena, / quanto Fiorenza sua vicina e Siena.) (*ibid.*)と言うが、Bernardo Dovizi (Il Bibiena) (1470-1520)はMedici家のLeo Xの教皇着任(1513)と共に枢機卿となったAriostoの友人で詩人でもある。ここはプライベートな事情が絡む。

次に三人の枢機卿たちが来る。「ここでは誰もシジスモンドやジョヴァンニヤ/ルドヴィコ、ゴンザガ家、サルヴィアッティ家/アラゴン家の三人の前に出る者はない、/各々この乱暴な怪物の強敵である。」(Non mette piede inanzi ivi persona

4) 『オルランド』初版(1516)(40歌)時にはFrançois I^{er}頌詞はすでに含まれ、後年のフランス国王の不面目なPaviaでの虜囚(1525)でさえ同情的に語られる(XXXIII, 53)。

5) Charles-Quint頌詞は1526年版および決定版(1532)(46歌)で追加される。なお、François I^{er}とCharles-Quint両国王の頌詞の併置はScèveのDélie(1544)にも見られる(cf. diz.53, 54, 55)。

/ a Sigismondo, a Giovanni, a Ludovico : / un Gonzaga, un Salviati, un d'Aragona, / ciascuno al brutto mostro aspro nimico.) (XXVI, 49) これらの名は同時代人でないとは判然とはしない。詩法上 les vers rapportés で技巧的に並べられ、Malagigi に替わってさらに解説すれば、Sigismondo Gonzaga (?-1525) とは、Mantova の Gonzaga 家の当主 Francesco の弟の枢機卿であり、Giovanni Salviati (1490-1553) とは、Firenze の Medici 家の当主 Lorenzo il Magnifico の長女 Lucrezia の娘婿で枢機卿、Giovanni delle bande nere であり、Ludovico (Luigi) d'Aragona (1474-1519) とは、Napoli 王、Ferdinando の息子の枢機卿である。いずれも当代イタリアの最強の家系の出である。

勿論 Gonzaga 家の当主、Ariosto の patronne、Isabella d'Este の夫、Francesco Gonzaga (1466-1519) もおり、その息 Federico II (1466-1519) も父に従い、義弟 (Isabella の弟) Alfonso d'Este (1476-1534) と娘婿 (長女 Leonora の夫) Urbino 公、Francesco Maria della Rovere (1490-1538) の二人も近くにいる。いずれも Mantova、Ferrara、Urbino の当主である。さらに、Francesco Maria della Rovere の息、Guidobaldo II も父に負けをとらず、Genova の Fiesci 家の Ottobone、Sinibaldo 二兄弟もおり、Francesco Gonzaga の叔父にあたる Luigi da Cazolo は允文允武の士である。

「エステ家の二人のエルコレ、二人のイポリット、ノもう一人のエルコレ、もう一人のイポリット、ノ一人はゴンザガ家、他はメディチ家、モノ怪物の痕跡を追い、これを困倦させる。ジュリアノは息子に、フェランテは兄にノ遅れをとるとも思えず、...」(Duo Erculi, duo Ippoliti da Este, / un altro Ercule, un altro Ippolito anco, / da Gonzaga, de' Medici, le péste / seguon del mostro, e l'han cacciando stanco. / Né Giuliano al figliuol, né par che reste Ferrante al fratel dietro ;) (XXVI, 52) とこれも分かりにくい。しかし、いよいよ Ariosto のお膝下 Ferrara の Este 家の登場である⁶⁾。二人の Ercole とは、当主 Alfonso d'Este の父 Ercole I (1431-1505) と息 Ercole II (1508-1559) で、後者はフランス王 Louis XII と Anne de Bretagne の娘 Renée を嫁としており、詩人 Clément Marot も一時その宮廷に謫居を求める。二人の Ippolito とは、Alfonso d'Este の弟の枢機卿 Ippolito d'Este (1479-1520) と次男で同じく枢機卿 Ippolito II (1509-1572) であり、前者の兄弟は Ariosto の主君で『オルランド』の献呈主である。

もう一人の Ercole とは、Francesco Gonzaga の次男の枢機卿 Ercole (1507-?)、もう一人の Ippolito とは、Lorenzo il Magnifico の孫(つまり三男の Nemours 公 Giuliano 息)の枢機卿 Ippolito (1511-1535) である。「ジュリアノは息子に、」とは、Nemours 公 Giuliano (1478-1516) は息子の枢機卿 Ippolito に、「フェランテは兄に」とは、Francesco Gonzaga の三男 Ferrante (1507-?) は兄の枢機卿 Ercole に遅れぬよう、との意味である。

この辺りは Ferrara の Este 家とは特に関係の深い Mantova の Gonzaga 家と

6) Este 家自身に対する頌詞は勿論十分にスペースを費やし、Bradamante に Merlin の霊が現れ、妖術使 Melissa の口から一大家系図が語られる(III, 15-62)。

FirenzeのMedici家、あるいはNapoliのAragon家出身の宮廷人や枢機卿たちで占められている。当時の『オルランド』の読者にはこのような解説抜きで詩句に散りばめられた固有名詞は、たとえ同名が多くとも、すべて身近なものであったであろう。

5 . Malagigi による泉水彫刻の解説 (その3) (XXVI, 51-53)

後半部はその他の人物に当てられている。「...アンドレア・ドリアも / 迅速さでは負けず、フランチェスコ・スフォルツァも / 誰も自分を凌ぐことを許さない。」(...nè che manco / Andrea Doria sia pronto ; nè che lassi / Francesco Sforza ch'ivi uomo lo passi.) (XXVI, 51) Andrea DoriaはGenovaが生んだ、Charles-Quint麾下の偉大な提督である⁷⁾。Francesco Sforza (?-1535)はMilanoの当主Ludovico il MoroとIsabella d'Esteの妹Beatrice d'Esteの間の子で次男のFrancesco II (?-1535)である。

さらに「気高い、高名な、輝かしいアヴァロス家 / の血筋からは二人おり、彼らの紋章には、 / ... / 一方はペスカラの不屈のフランチェスコ、 / 他はアルフォンソ・デル・ヴァストと読める。」(Del generoso, illustre e chiaro sangue / d'Avalos vi son dui c'han per insegna / ... / l'uno Francesco di Pescara invitto, / l'altro Alfonso del Vasto ai piedi ha scritto.) (XXVI, 52)に見られるのは、Pescara侯爵Francesco d'Avalos (1490-1524)とその従兄弟のVasto侯爵Alfonso d'Avalos (1502-1525)である⁸⁾。どちらもCharles-Quint麾下のスペインの提督で、前者は閨秀詩人Vittorio Colonnaの夫。他方、後者は、1531年10月Ariostoが、Alfonso d'Esteの使節として、教皇Clemens VIIのFerrara攻撃を阻止するため、援助を求めて会いに行くのがこの人物。この若者は『オルランド』の作者を使節としてより詩人として厚遇し、多分皇帝Charles-QuintにAriostoの才能を紹介したのもこの人物であろう。ちなみに、ブラド美術館にはこのAlfonso d'Avalosを描いたTizianoの勇壮な肖像画が今でも見られる。

最後を飾るのは、「スペインの華」(l'ispano onor) (XXVI, 53)のConsalvo FerranteとMonterrato侯爵のGuglielmo IIIとである。あまりに大勢の英雄たちが画面に溢れるので、この二人を探すのも容易ではない。「あれほどMalagigiが賞賛するのに、私はどこへ見失ったのか？」とAriosto自身もまるで画面を目の当たりにするが如くに感慨を洩らす⁹⁾。かくて、次の場面では、Merlinの泉水彫刻の話は終わり、Malagigiの解説に満足した騎士たちやMarfisaは食事の後柔らかな緑の絨毯の上で休息をとる。するとそこへ新たな到来者が現れ新しい局面へと話を導くこととなる。

6 . Digressio - Ekphrasis - Prophétie - Allégorie

したがって、上に見たMerlinの泉水彫刻の話は全体の物語の筋の流れを一時中

7) すでにこの人物の頌詞は以前見られた。Cf. XV, 30-34.

8) Cf. XV, 28-29.

9) これはよく見られるintrusion subjectiveのケースである。

断する形で挿入された「脱線話」(digressio)である。こういった風に物語の途中で話が急に正規の流れを脱して別の方向に逸れる、あるいは逸らず物語学上の技法である。例えば、『オルランド』では、XI, 22-28でAriostoが飛び道具の鉄砲や大砲がいかに邪悪な悪魔の発明物であるか、嘆く件がある。勿論、これはAriostoの時代の発明物であり、Charlemagneの時代の人物がこれを知っていたとは当然意図的なanachronismeではある。このような脱線は詩人Ariosto自身の直接読者に対する「呼びかけ・話しかけ」である場合が多い。登場人物の脱線は何か問われた事柄に対する説明であったり、その説明が一つの独立した話となれば、物語中の物語(racconto nel racconto)、つまり、枠物語となって展開したりする。これは『オルランド』中には14箇所も見られ、この作品全体に錯綜した多様性を与えている。

次に、脱線する動機が一つの建造物であったり、芸術品であったり、特異な地形や風俗であったりして話者や作者がこれを説明・解説・描写する場合もある。古代では、「見るにつけても驚くべき...」(thauma idesthai... ; mirabile visu...)といった常套句で始まる「描写法」(ekphrasis)である¹⁰⁾。このMerlinの泉水彫刻もこれに相当するが、III, 15-62では、Bradamanteが悪人に突き落とされた洞穴において、妖術使のMelissaに出会い、MelissaにMerlinの霊廟に案内され、荘厳な場所の描写の後、Merlin自身の歓迎の声に続きMelissaの口からBradamanteの腹から生まれるであろう後裔たちの霊が招致され、Este家の家系図が解説される。古代では、HomèreやVirgileが英雄AchilleやÉnéeの楯に描かれた未来図を叙述する場合もこの例である¹¹⁾。

『オルランド』では、未来の予言は常にEkphrasisを伴うかといえ、単に登場人物同士が旅の道中での対話の中で語られたり(XIII, 55-73 MelissaがBradamanteにEste家の女系系譜が語られる)、海上を航海中に予言されたり(XV, 19-36 AndronicaがAstolfoに未来のCharles-Quintの艦隊の航海を語る)することもある。しかし、予言は、Virgileの『エネイド』VIやDanteの『神曲』「地獄篇」の如く、冥界の霊が姿を現すとか、浮彫に刻まれた像が目前に浮かび上がるといったいわば「絵物語」の手法による場合の方が迫力があり、真に迫るものがある。「絵物語」といえば、15世紀半ばにPiero della FrancescaによるArezzoのサン・フランチェスコ聖堂の「聖十字架伝」に基づく壁画群を思い起こす。AriostoもRomaへの使者の任務の道すがらこのquattrocento最大の珠玉と云っていい芸術作品に触れたのではないだろうか？そこでも聖木を取り巻く予言のテーマが精緻な筆致で描き出されている。

最後に、この浮彫に登場する英雄たち、詩人と同時代を生きた歴史上の人物たちが、「貪欲」という怪獣を殺しに現れるであろうという予言を口実として、詩人と同時代の読者を喜ばせたというだけではなく、もう一度「貪欲」のアレゴリーを確認しておこう。時と共に次第に成長してゆく怪物のイメージはVirgile『エネ

10) 拙稿L'ekphrasis d'œuvres d'art chez les poètes grecs anciens 『言語文化研究』X, 1984参照。

11) 『オルランド』にも楯や武器の描写は見られる。Cf. XX, 82; XXV, 15-16.

イド』IVの有名な「噂」のアレゴリーを思わせる。しかも「貪欲」が特に高位高官の者、聖職者たちに牙を向けるというあたりは、当時世俗的な権能に触手を延ばした教皇およびその側近たちの貪欲さを窺わせる。この点、「教皇とその孫たち」のテーマで肖像画を描いたMelozzo da Forli (Sisto IV) や Raffaello (Leo X) や Tiziano (Paulo III) といった画家たちの直感したであろう「権力欲」に対する風刺と一脈通ずるものがある。

7. 結び

Merlinの泉水彫刻の話は『オルランド』という巨大な建築物のほんの小部屋の壁面の一隅を飾る一飾りでしかない。しかしこういった細部に至るまで名人芸の筆致は行き届いており、伝統的な諸手法の結晶が窺われる。そしてなによりも1516-1532年当時にイタリア半島で活躍した人々を思い浮かべる時、この小さな装飾品はますますその輝きを増してくる。

(D. 1974、大阪大学教授)